

石川啄木 歌人、詩人、評論家。鋭い社会批判をしつつ、代償行為の短歌で新風を呼び、貧窮の底で夭折。

いしかわたくぼく

帝国大学始・1886 = 岩手県生れ。

北岩手郡渋民村の宝徳寺に育った。

帝国憲法発布1889 = 3歳 :

日清戦争始・1894 = 8歳 :

日清戦争終・1895 = 9歳 :

Bushidou・・1899 = 13歳 : 県立盛岡中学在学中、盛岡女学校生徒堀合節子を知る。

ビブ国産化・1900 = 14歳 : 『回覧雑誌(丁二雑誌)』を発行。(明星)系の浪漫主義文学に触れて詩人を志す。

田中正造直訴1901 = 15歳 : 『岩手日報』に短歌作品が掲載される。

教科書疑獄・1902 = 16歳 : 学業に身が入らず、県立盛岡中学中退。上京して、与謝野鉄寛、晶子夫妻他を訪問。

日比谷公園・1903 = 17歳 : 就職できず、帰郷。再起を期して『ワグネル』研究するも反響なし。*アメリカの女流文学者の編集した詩集に強い影響を受け、詩作を志す。初めて啄木の名で発表した『愁調』が注目される。

日露戦争始・1904 = 18歳 :

日露戦争終・1905 = 19歳 : *愛の至上性を歌う詩集『あこがれ』を刊行し、天才少年詩人の名をはせた。この年、節子と結婚し、また父が失職して生活難に直面させられ、詩情に衰えをきたし、小説に筆を転じた。

韓国反日暴動1907 = 21歳 : 北海道に渡り各地を流転したが、

アヲ井 創刊・1908 = 22歳 : 単身上京し創作に専念しようとした。_結局、小説は成功しなかったが、

伊藤博文暗殺1909 = 23歳 : *この時期の苦悶を綴る『ローマ字日記』が、自然主義的私小説以上の鋭い自己凝視をみせている。家庭に対する啄木の無配慮にたえかねて妻が家出した。その衝撃から生活を人生の第一義と考えるようになり、その立場による評論や短歌を制作していった。続いて起こった大逆事件を契機に、貧しい生活の出口を社会主義に求め、『時代閉塞の現状』等を書いて鋭い社会批判を示す。一方、短歌を、現実を改変できない者の悲しい代償行為とみなすにいたり、

韓国併合・・1910 = 24歳 : 『一握の砂』、

大逆事件判決1911 = 25歳 : 慢性腹膜炎と診断され、ついで妻も母も罹病。

明治天皇没・1912 = 26歳 : *『悲しき玩具』にまとめられたその短歌は、冷笑的諧謔性や深い哀傷感をもって日常の感情を率直に歌い、歌壇に画期的新風を呼んだ。時代の悪化もあって絶望を深めつつも、なお遺稿の文語自由詩『呼子と口笛』に現実飛翔の夢を歌いあげ、貧窮の底で没した。